Osaka Shoin Women's University Repository

山路の露注釈（四）

西木忠一
池田良子

凡例

一、本稿は『続群書類従』巻第五百十（物語十）『山路の露』を注釈したものである。

一、『続群書類従』本は全編区切らず書き続けてあるが、内容上から適宜段に分け、各段ごとに見出しを付した。

一、本注釈は、本文・通釈・語釈・補記の四項より成る。

一、本文は読解の便宜を考え、適宜次のような工夫を加えた。

(1) 仮名づかいは歴史的仮名づかいに統一した。

(2) 時には仮名書きの語を漢字に、漢字書きを仮名に改めた。

かほる→薫　せうと→兄人

猶→なほ　其此→そのころ

(3) 句読点を付し、送り仮名を補った。

(4) 反復記号はもとの文字にもどした。

中々→なかなか

(5) 会話や消息の部分は「」で示した。

一、甚しい本文異同のある場合は補記の項で触れた。なお、その項における「第一類本」（主として「刊本系」）「第二類本」（主として「写本系」）の呼称は、本位田重美氏（『源氏物語外篇　山路の露第一類本　第二類本』）のそれを踏襲したものである。

一、補記の項等で明示した諸作品の本文は『新潮日本古典集成』に、和歌は『新編国歌大観』によった。なお、上記以外の場合はその都度明記した。

十一　火　焔

さしも言少なに、心もとなき御本性なれど、幼くよりとりわきひとつにてありし名残りむつましきにや、これにだに思ふこと少し続

Osaka Shoin Women's University Repository

け給へる、いとあはれなり。「今宵いかにして帰り給はん」など、例のさしすぎ人もいとほしがれば、尼君も「げにいかで通ひなれぬる人だにも、なほ踏み迷ひぬべき山道の懸路に侍るめるを。今宵ばかりは旅寝し給へかし」といひ出だし給へれど、「急ぎ参るべくのたまひつるに、いかが泊りは侍るべき。月の光にも道たどたどしかるまじくなん」とて立つを、さもおよすげてと、うつくしみあへり。夜更けぬべき心まうけに、弓矢負ひたる者どもなどありければ、いとたのもしげなり。夜中うち過ぐるほどに、参り着きたれば、御門もみな鎖されにけり。今宵はさらば出でなんと思へども、いづくへ行きたりけるぞなどたづねられんもむづかし、この御ことつてに、かくなど聞こえてこそ母君にもいはめと、らうらうじき心にて、門たたかんもことありがほなり、いかにせましと思ひわづらひて、とばかり立ちたるに、人人の声あまたして、いみじうあはたたしげなるを、何ごとならんと思ふほどもなく、火燃え出でて煙もみちみちたり。ただこの町のまはりと見えて、いと近ければあさましくて、あらかにたたかせたるに、宿直にさぶらふ者どもも、いまぞ見つけて騒ぎつつ急ぎあけたるに、「などここは鎖されたる」といへば、「御物忌みなりけるをおぼし忘れて、にはかになんかためられ侍りつ」といらふ。されどそのかひなし。侍所なりけるをのこどもみな起き出でて、「ゆゆしくとく参り給へるものかな」といふも、いとをかしと思へり。この殿近しと聞きつけて、参り給ふ人人の馬・車の音しげう騒ぎみちたり。火燃えまさりてあやしかりけれども、にはかにあらぬ方へ風吹き追ひて、この殿をばよけたれば、おのおの「めづらかなること」とのたまひて、かたへはまかで給ひなどす。

〔通釈〕

（浮舟は）それほど口数が少なくて、はきはきしない御性質であるが、幼少のころから特に一緒に育って来たゆえの親しさであろうか、小君にだけは胸の思いを少し話されるのは、なかなか胸にしみ入るものである。（尼達が）「今夜はどのようにしてお帰りなさいますか」などと、いつものごとく口を出しすぎる人達も気の毒がったので、尼君も、「本当に、どうして（お帰りなさるのでしょう）、この道を通い馴れた人でさえも、やはり踏み迷ってしまうけわしい山路でありますのに、せめて今晩だけはここでお寝みなさいませ」とおっしゃるけれども、（小君は）「すぐに帰参するよう申されましたのに、どうしてここで宿れましょう。月の光にも（助けられて）道はたどたどしくはありますまい」と言って立ち上がるのを、（人々は）なかなかご立派なことと、いとおしく思い合った。夜が更けてしまうだろうからその心準備に、弓矢を負った者どもが従っているので、それはもう安心である。夜中が過ぎる頃に、（小君が薫のもとに）帰参すると、御門はすっかり閉じられていた。（仕方なく小君は）今夜はそれじゃわが家に引き取ろうと思うけれども、（薫に小君は）どこへ行ったのかなどと尋ねられるのも具合が悪い、（浮舟からの）御伝言は「かくかく（でございました）」などと申し上げて母君にも伝えようと、いっかどの気働きで、門を叩くのもいかにも何かありげに見える、どうしたものであろうと思いわずらって、しばし立ちつくしていると、大勢の人々の声がして、ひどくあわた

Osaka Shoin Women's University Repository

だしそうであるのを、何ごとであろうなどと思うほどもなく、火が燃え上がって煙もあたりに満ち満ちてしまった。（火元は）この町のあたりと見えて、ひどく近くなので驚いて、音荒く門を叩かせたところ、この邸の宿直でお仕えしている者たちも、今の今火事を見つけて騒ぎながら門を急いで開けたので、（小君は）「どうしてこの門が閉じられているのですか」と言うと、（宿直の者は）「今日はもの忌みだったのをすっかり忘れていたので、急に閉じられたのですよ」と返事をする。そうではあるが、（厳重に閉じてあったのに、開けてしまったので）閉じた甲斐もない。侍所につめていた男達もみな起き出して、（男達が）「不吉にも早く参られたものですね」というのを、（小君は）ひどくおかしいと思った。（火元が）この邸に近いと聞きつけて、かけつけなさる人々の馬・車の音が騒々しくひびいていた。火はますます燃えあがって、気がかりであったが、急に他の方角に風が吹いていって、この邸を避けたので、それぞれ「珍しいことだ」とおっしゃって、一部の人々はお帰りなさる。

〔語釈〕

○心もとなき御本性――はっきりしない御性質。浮舟の性質をいい、彼女が自分の意志や気持をはきはきと表明しないことをいう。「人の御本性も、さるやむごとなき父親王の、いみじうかしづきたてまつりたまへるおぼえ、世に軽からず」（源氏・真木柱）

○これをだに――「これ」は小君をさす。もともとはきはきしない浮舟であるが、弟の小君にだけは「思ふこと少し」話すのである。二人の親密さが推しはかれよう。

○例のさしすぎ人――「さしすぐ」は、程度を越えて物事をすることの意。「夢の浮橋」の巻に「例のものめでのさし過ぎ人、いとありがたくをかしと思ふべし」と見え、小野の尼達をいう。

○山道の懸路――「懸路」は崖に木材をあたかも棚のごとくにかけわたして作られた道をいう。だが、普通は「けわしい道」の意で用いられる。「浅き心ばかりにては、かくも尋ね参るまじき山のかけ路に……」（源氏・橋姫）

○さもおよすけて――いかにも大人ぶって。「およすく」は子供が自分の年齢のわりに「大人ぶる」意。ここは小君が尼君たちの制止も聞き入れずに、「急ぎ参るべくのたまひつるに、……。月の光にも……」と答える姿に、尼君たちが感じたもの。「いで、およすけたることは言はぬぞよき。さは、な参りたまひそ」（源氏・帚木）

○うつくしみあへり――「うつくしむ」は子供などの、小さいものや弱いものをかわいがる意で、ここは小君の帰参しようとする姿勢に、尼君たちがいささかいじらしさを感じている。

○心まうけ――心準備。今から京まで帰れば夜はすっかり更けてしまうに違いなく、そのための準備をいう。

○参り着きたれば――（小君が薫の御殿に）帰参したところ。

○さらば出でなん――それではわが邸に帰ろう。小野から薫の御殿に直行したのであったが、そこは「御門もみな鎖され」ていたので、仕方なく今夜のところは自邸に帰ろうと考えたのであった。

○この御ことつて――浮舟からの御伝言。（「十　伏目」にくわしい）

Osaka Shoin Women's University Repository

○らうらうじき心――いかにも年功を経た感じがすることをいい、そうした気働きのことである。

○町――平安朝における区画（市街地）の単位。一町は四十丈四方（約一万平方メートル）で、公卿の住宅の基準は一町であった。なお、庶民の場合は一町を三十二等分した一つ分（一戸主（へぬし）といい、五丈×十丈で約三、七アール）であった。これは一町を、南北を八門に、東西を四行に分けたもの、いわゆる「四行八門（しこうはちもん）制」によるものである。

ところで、「火災」は薫の御殿の近辺から出火したのであった。

○そのかひなし――物忌みのために「御門もみな鎖（さ）していたというのに、火災発生により門を開けてしまうことになったので、その甲斐がないというわけである。

○侍所――平安時代に、院・親王・摂政・三位以上の家の、家務を司るものを「侍」といい、彼らの詰所を「侍所」といった。「侍所」の『源氏物語』における用例は、「ありつる侍（さぶらひ）に……」（橋姫）の一例のみ。

○風吹き追ひて――（これまで吹いていた方角とは違った方へ）風が吹いて行って。

○かたへ――一部分。「かたへはなくなりにけり」（土佐日記）。

〔補記〕

①本段は数箇所にわたっていささか本文異同が見える。

(A)「ありし名残りむつましきにや」の箇所を、第二類本は「あなつりならひてしなこりむつましきにや」とする。

(B)「いかが泊りは侍るべき。月の光にも道たどたどしかるまじくなん」を、第二類本は「いかゝとまち侍る、月の光もうと〳〵しかるへくなん」とする。

(C)「いとたのもしげなり」の箇所を、第二類本は「人おほく頼もしげなり」とする。

(D)「母君にもいはめと、らうらうじき心にて、門たたかんもことありがほなり」の箇所を、第二類本は「母きみにもいはめなとらう〳〵しき心にて思ふへし。うちたゝかむもことありかほ也」とする。

(E)「火燃えまさりてあやしかりけれども、にはかにあらぬ方へ風吹き追ひて、この殿をばよけたれば」の箇所を、第二類本は

a＝火はこと〳〵しけれと

b＝風の吹かけてあらぬかたへなれは

c＝このとのはたいらになむ有ける

としていて、特に第二類本はcで文を切っている。第一類本では「火燃えまさりて…かたへはまかで給ひなどす」までを一文にし、第二類本は二文とする。二文にすることによって文意は簡潔になろうが、燃えあがった炎が折からの風に煽られて人々の心を動揺させるのを考えあわせると、第一類本のごとく一文にした方が、この場の描写としてはより相応しいのではなかろうか。

②「幼くよりとりわきひとつにて」について。

「夢の浮橋」の巻に、妹尼から「この君（小君のこと）は、誰（たれ）

Osaka Shoin Women's University Repository

にかおはすらむ。なほいと心憂し。今さへかくあながちに隔てさせたまふ」とつめ寄られた時、浮舟は「すこし外ざまに向きて見たまへば、この子は、今はと世を思ひなりし夕暮にも、いと恋しと思ひし人なりけり。同じ所にて見しほどは、いとさがなく、あやにくにおごりて憎かりしかど、母のいとかなしくて、宇治にも時々率ておはせしかば、すこしおよすけしままに、かたみに思へりし童心を思ひ出づるに、夢のやうなり。」とあるごとく、同じ所で一緒に暮らした二人であった。また「浮舟」の巻にも彼女が覚悟をきめた折、「親もいと恋しく、例はことに思ひ出でぬ弟妹のみにくやかなるも、恋し。」と見える。

③近隣の火事について。本位田重美氏は、

小君が小野から夜おそく帰ってきて近隣の火事に遭遇する記事があるが、『右京大夫集』にも宮仕当時の近火模様を語っているところがある。(『源氏物語外篇山路の露第一類本第二類本』二一二頁)

と述べられて、『山路の露』を右京大夫の作とする証しに加えられた。

『建礼門院右京大夫集』に記された近火の条は

いづれのとしやらむ、五節のほど、内裏ちかき火の事ありて、すでにあぶなかりしかば、南殿に腰輿まうけて、大将をはじめて、衛府つかさのけしきども、心々におもしろく見えしに、おほかたの世のさわぎも、ほかにはかかることあらじとおぼえしも、わすれがたし。宮は御手ぐるまにて行啓あるべしとぞ聞えし。小松のおとど、大将にて、直衣に矢負ひて、中宮の御方へまゐり給へりしことがらなど、いみじうおぼえき。

雲のうへは　もゆるけぶりに　たちさわぐ　人のけしきも
目にとまるかな

とあって、『山路の露』の近火の描写と対比すると、『山路の露』の方がより臨場感があって、優れて文学的であるといえよう。

④『源氏物語』において火災を語る箇所をあげてみると

(1)……御社のかたに向きて、さまざまの願を立てたまふ。また海の中の龍王、よろづの神たちに願を立てさせたまふに、いよいよ鳴りとどろきて、おはしますに続きたる廊に落ちかかりぬ。炎燃えあがりて廊は焼けぬ。(明石)

(2)かかるほどに、住みたまふ宮焼けにけり。いとどしき世に、あさましうあへなくて、うつろひ住みたまふべき所の、よろしきもなかりければ、宇治といふ所に、よしある山里持たまへりけるにわたりたまふ。(橋姫)

(3)その年、三条の宮焼けて、入道の宮も、六条の院にうつろひたまひ、何くれともの騒がしきにまぎれて、宇治わたりを久しうおとづれきこえたまはず。(椎本)

となり、いずれもごく簡単に語られていて、燃え上がる炎が読者の眼前に浮んで来ない。ところが、『山路の露』では、

(4)……とばかり立ちたるに、人人の声あまたして、いみじうあはたたしげなるを、何ごとならんと思ふほどもなく、火燃え出でて煙もみちみちたり。

Osaka Shoin Women's University Repository

(5)この殿近しと聞きつけて、参り給ふ人人の馬・車の音しげう騒ぎみちたり。

(6)火燃えまさりてあやしかりけれども、にはかにあらぬ方へ風吹き追ひて、この殿をばよけたれば…。

と、その場のさまが如実に語られている。それは(4)の人々の声・(5)の馬・車の騒ぎ・(6)の火向きの変化などが特に現実味を帯びている。いま仮りに、この場面を絵画化すれば『伴大納言絵巻』の、応天門炎上の場に近似するのではなかろうか。つまり、応天門を焼く黒煙と『山路の露』の煙・前者の騒ぎと後者の騒動などが、見事に重なって来るのを禁じえない。『山路の露』の近火の場面は、より中世的な匂いの濃いものであるといえよう。

十二　渡　殿

いみじかりつれど、ほどなく燃えとまりて、世の中しずまりて、皆まかで散りなどして、名残りなくしめやかなるに、君は明けゆく空のをかしきに、渡殿に立ち出でて見給ふとて、かの童召し寄せたり。「昨夜は更くるまでこそ待ちしか。いつほどにものしつるぞ」とのたまへば、「ありつるまぎれに参りつる」と聞こゆ。「いかにぞ。例の同じいぶせさならんと思ふこそかひなけれ」とのたまふにも、「さしもあらぬさまにきこえなしてよ」とて、まことに憂しと思ひ給へりつる人の御面影、あはれに心苦しう思ひ出でられて、しばしためらはるれば、つひに隠れなからんものゆゑ、こと違ひてはあしかりなんと思ひて、ありつるさまこまかに聞こゆ。日ごろもさぞとたしかに聞き給ひしことなれど、なほうつつとは思ひ給はぬに、げにとさて思はすらん、めづらかにあさましうおぼす。「あらぬさまにさへなり給ひにければ、その人ともなく面がはりして」と申せば、「うとましげにやなり給ひし」と問ひ給へるに、ただ「ありしながら」などいふままに、涙の落つるをまぎらはしてうつぶしたるを、いとあはれに見給ふ。

〔通釈〕

なかなかの火の勢いではらはらの思いであったが、ほどなく火もおさまって、世間も静かになり、人々もみな散って行きなどして、あとかたもなく静かに落ちついている時に、君（薫）は明けて行く空の味わい深さにひかれて、渡殿にお出でになろうとして、あの童を呼びになった。（薫は）「昨夜は夜が更けるまで待っていたが。いつごろ帰ったのか」とおっしゃると、（小君は）「あの火事騒ぎの時に参上いたしました」と申し上げる。（君は）「して返事はどうだった。きっといつものごとくぱっとしない返事だと思うのも甲斐のないことだ」とおっしゃるにつけても、（浮舟が）「なんとかうまくとりつくろって申し上げておくれよ」といって、本当につらいことだと思っていらっしゃる方（浮舟）のご様子が、（小君は）気の毒に心苦しく思い出されて、しばしためらわれたものの、結局のところ事の次第がすっかりあらわになってしまうものだから、違いがあってはよくなかろうと思って、自分の見て来た様子をこまかく申し上げる。（薫は）常日ごろもそうであろうと確かにお聞きになってい

Osaka Shoin Women's University Repository

たことであるが、それでもやはり現実のこととはお思いなさらないので、なるほど（そのようであろうと浮舟が）お思いであろうと、思いもよらずあきれたこととお思いになる。（小君が）「以前の姿でなくおなりなさいましたので、その方（浮舟）とも思えないほど面変りなさって」と申し上げると、（薫は）「嫌な感じにおなりなのか」とお尋ねになると、（小君は）「（いえ）、以前のままで（ございまして）」などというままに、涙の落ちるのをまぎらわしてうつぶしたのを、（薫は）ひどく心にしみてごらんになる。

〔語釈〕

○しめやかなる――しっとりと落ち着いていて、もの静かであること。「つれづれと降り暮らして、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさをさ人少なに」（源氏・帚木）

○渡殿――殿舎間をつなぐために設けられたもの。「廊」とも。普通、寝殿と対の屋を結ぶ。「壁渡殿」（壁・板などで両側を覆う。格子が備えられる）・「透渡殿」（柱のみで高欄あり）があった。

○かの童――「小君」。（「二　焦慮」の語釈「兄人の童」参照）

○ありつるまぎれ――昨夜のあの火事騒動をいう。「まぎれ」は混乱・ごたごたの意。

○いぶせさ――「いぶせき」こと。うっとうしさ。ここでは、いつもの様なうっとうしい返事だと思うと、ぱっとしないことだという薫の言葉。

○つひに隠れなからんものゆゑ――結局のところは明らかになって隠しきれないことがらなので。（補記③参照）

○あらぬさま――浮舟が以前の姿でなくなってしまったこと。つまり剃髪姿になったことをいう。

○ありしながら――これまでのまま。薫が小君に、浮舟は「うとましげにやなり給ひし」と尋ねたので、小君が答えたことばである。剃髪はしたけれども、決して嫌な感じではなく、以前のままだという。薫は母女三の宮が尼姿であったことをいぶかしく思った日があった。そうしたことがここに関わっていると考えられる。

〔補記〕

①本段における本文異同は次のごとくである。

(A)「a いみじかりつれど、ほどなく燃えとまりて、世の中しずまりて、b 皆まかで散りなどして、c 名残りなくしめやかなるに、君は明けゆく空のをかしさに、d 渡殿に立ち出でて見給ふとて、e かの童召し寄せたり」の箇所を、第二類本は「しつまりて名残なくしめやかなるに、君はわたとのにたち出させ給て、明ゆく空のけしきをかしきをながめ入せたまひてわらはめしよせたり」とする。これを整理すると、

a＝ナシ　　b＝ナシ

c d＝順序逆。かつ c d ともにいささか異同あり。

e＝ナシ

となる。

(B)「『a いかにぞ。例の同じいぶせさならんと思ふこそかひなけれ』b とのたまふにも、『さしもあらぬさまにきこえなしてよ』とて、……」の箇所中の a b を第二類本は

Osaka Shoin Women's University Repository

a＝ナシ　b＝「此とのに」

とする

(C)「……聞き給ひしことなれど、なほうつつとは思ひ給はぬに、げにとさて思はすらん、めづらかに……」の箇所を、第二類本は「きこえたまへれど、けにさたかなるはめつらかに」とする。整理して示すと、

a＝「きこえたまへれと」

b＝ナシ

c＝「けにさたかなるはめつらかに」

となる。

②「さしもあらぬさまにきこえなしてよ」は本注釈「十　伏目」において、小君が

「ありつる御かへりなくては、いかにのたまはせん。ただひとくだりにてもたまはりて、帰り侍らん」といへば

浮舟が、

「いとうたて、年月のほどに思ひかはり給ひにけり。かくばかり憂き名をあらぬさまにいひなして、もてかくさんとは思ひ給はずや」とうらみられて、しひてもえいはず伏目なり。

と語られたことをいう。

③「つひに隠れなからんものゆゑ」は、浮舟が小君に「さしもあらぬさまにきこえなしてよ」と懇願していたことを思うと、小君はいささかためらってしまったものの、といって隠してみたところで結局はばれてしまうのだと思って覚悟をきめるわけである。なお、『日本古典全書』七「古本山路の露」（池田亀鑑校註）にはこのあたりの本文が

つひに隠れあるまじきに、長からむもののゆゑ

とあり、「なからむ」を「長からむ」とする。

④「涙の落つるをまぎらはしてうつぶしたる」に見える小君は、薫の使者としての役目を思う一方で、姉の剃髪した今の境涯を思いやる姿が如実にうかがえる。感情を理性で抑制しようとするものの落ちる涙は止めようがなく、「うつぶ」すことで「まぎらはして」しまおうとするところが、薫をして「いとあはれ」と感じさせたのであった。

十三　青　鈍

「さて、その伝へよとあるらん文は」とのたまへば、取り出だしたり。青鈍（あをにび）の紙いとささやかに、おし巻きたるうはべより、あやしうものあはれなり。ましてものの心ゆかしければ、あけて見給ふとて、「よからぬ人のあらむやうにもあるかな。われながらなどかく屈（くつ）しけん」とほほゑみ給ひて、ただありしながらの手なれども、筆の行く方（かた）も迷ひけるほどしるく見えて、墨つきかれがれにて、

いとひつつ捨てし命の消えやらで再び同じ憂き世にぞふる

まよはせし心の闇を思ふにもまことの道はいまぞうれしき

とあるを見給ふに、いみじうかなし。とばかりためらひ給へる御袖の雫、ところせきまでになん。ほのぼのと明け行く空の光に、いふ

Osaka Shoin Women's University Repository

よしなう清らにて、ものを深くあはれと思ひ給へる御けしき、いみじうなまめかしく見え給ふを、この子もいとめでたしとうちまもり聞こえつつ、かばかりおぼしためるに、かひなきさまになり給へるを、惜しうあたらしと思へり。「なほしばし。思ふやうなんある。いま今日明日過ぎて、伝へさすべき」とのたまひて持給へり。「いとかろがろしきやうなりとも、今宵忍びてものせんと思ふを、その心設けして、夕つかた参れ」とのたまへば、いかに思さんと苦しけれど、さもえ聞こえさせず、承りて出でぬ。

〔通釈〕

（薫が）「では、その伝えておくれとある文は（どれか）」とおっしゃるので、（小君は文を）取り出した。（文は）青鈍の紙を大層小さく巻いたその外側を見るにつけ、もう不思議なまでに心にしみ入るのである。まして（薫は）文の中も知りたいので、文の巻きものを開いてごらんになろうとして、「情趣を解さない人のようであることよ。われながらどうしてこうも心が弱くなったのだろう」とほほえまれて、ただもう以前のままの手ではあるけれども、筆の運びも迷いがちであったのがはっきり見えていて、墨つきが枯れ枯れであって、

いとひつつ捨てし命の消えやらで再び同じ憂き世にぞふる
まよはせし心の闇を思ふにもまことの道はいまぞうれしき

とあるのを（薫が）ごらんになるにつけても、ひどく悲しいことである。しばし目頭をおさえなさる（薫の）御袖の雫が目につくばかりである。ほのぼのと明けて行く空の光に、いいようもなく清らかであって、ものごとを深く心にしみて思いなさる御様子は、言葉にならねど奥ゆかしくお見えになるのを、この小君も大層結構ですばらしいことだとじっと見まもり申し上げながら、（薫が）こんなにお思いであるのに、（浮舟が）甲斐のない尼姿になりなさったのを、（小君は）ひどく残念なことだと思った。（薫は）「やはり、もうしばらく（待つべきだ）。自分にも思うところがある。今日明日を過ごして、そのうちに（母君に）伝えさせよう」とおっしゃって（浮舟の文を）お持ちである。（薫は）「ひどく軽々しいようではあるが、今宵こっそり行こうと思うので、その心準備をして、夕方に参上せよ」とおっしゃると、（小君は、浮舟が）どうお思いになろうかと思うと心苦しいけれども、そうも申し上げずに、お言葉を承って邸を出たのであった。

〔語釈〕

○さて――「さて」を地の文とする（『日本古典全書』「古本山路の露」）・会話とする（本位田重美『源氏物語山路の露』の二説あり。本注釈は後者を妥当と考え後説を探る。

○青鈍の紙――「青鈍」は薄黒い色で、凶色である。直衣・指貫・下襲・浴衣に、また几帳・御簾にも用いられたが、いずれも服喪中であった。「青鈍の紙」は『源氏物語』では、

鈍色の紙の、いとかうばしう艶なるに、墨つきなどまぎらはして（澪標）

の一例が見える。それは六条御息所の死に消息した光源氏に対する、娘斎宮の返書である。

Osaka Shoin Women's University Repository

○うはべ――表面に見えるところの意。
○屈しけん――「屈す」は気がめいってしまい、くさくさすることをいい、「くす」・「くんず」とも。
○ありしながらの手――以前のままの筆蹟。
○「いとひつつ」の歌――「この世を避けて、ひとまずは捨ててしまった私の命も結局は捨てきれなくて、またこうして再び同じこの憂き世に私は生きながらえていることです」の意。捨てた筈のこの世に今も生き続ける己の悲痛な思いを詠じた歌。
○「まよはせし」の歌――「私を思い迷わせていた心の闇を思うにつけても、今こうして仏道に入っている自分が、われながらうれしく思われます」の意。命は捨てきれなかったものの、こうして仏道帰依の日々が、今の自分を救ってくれていることによる喜びを詠じた歌。なお、「心の闇」は煩悩にさまよう人の心を夜の闇にたとえていう語で、心の迷いをいう。「かきくらす心のやみに迷ひにき夢うつつとは世人さだめよ」（古今・恋三・在原業平）。また、「まことの道」は仏への道をいう。「きみすらもまことのみちにいりぬなりひとりやながきやみにまどはむ」（後拾遺・雑三・選子内親王）。
○この子――小君のこと。
○かひなきさま――今更いってみても甲斐のない様子で、浮舟の尼姿をいう。
○惜しうあたらし――「惜し」「あたらし」ともに「惜しい」の意。なお、「惜し」は自分の手中のものが失われるのを愛惜する意を、「あたらし」はそのものが本来有している良さが生かされていないのをもったいないと惜しむ意を表わす。
○なほしばし――こうした事柄を（浮舟の）母君に伝えるのは、やはりもうしばらく（待つがよい）。
○いとかろがろしき――ひどく軽率なことの意。薫が小野のもとに「今宵忍びて」行く行為を「かろがろし」という。
○心まうけ――心に前もってあらかじめ用意すること。

〔補記〕

①「……a おし巻きたるうはべより、あやしうものあはれなり。ましてものの心ゆかしければ、あけて見給ふとて」の箇所を、第二類本は「……b をしまきたるうはゑしけれは、あけてみ給とて」とする。整理すると、

a＝「をしまきたるうはゑしけれは」とする。
b＝ナシ

となる。

②「『……』とのたまへば、取り出だしたり」について。本位田氏は

類従本の本文は「取出たり」とあるので、書本のように「取り出でたり」と読むこともちろんできるのであるが、このところの表現としては「取り出だしたり」とよむ方が筋が通ると思われる……

と注記（『源氏物語山路の露』一五八頁）された。本注釈も本位田氏の読み方を妥当と考える。

Osaka Shoin Women's University Repository

③「よからぬ人のあらむやうにもあるかな」について。本位田氏は、久しくあわぬ、なつかしい母親に送る文が、青鈍の紙というのはいかにも風情がなさすぎる。薫は、それは浮舟のそばにいる人の気がきかないせいだと考えたのである。次の「われながらなどかく」は、それにしても、浮舟ともあろう人がこんな文を書くとは、よくよく思い沈んでいるのだろうな、と一半を彼女自身の心のあり方の問題として、同情的な見方をしているものと解せられる。もっとも「くつしけん」とあって「くつし給ひけん」と記されていないから、これを薫自身のことを省みて述べた文ととることも出来ないこともない。浮舟の身を案ずる今までの心痛から解放され、何となくほっとした気持で、浮舟はこうやって親に文を書く心境になっているのだから、何もそう心配することはなかった、それに私は何だってこんなに思い結ぼおれていたのだろう、そういう安堵感が次の「ほほゑまれ給ひて」を導き出すのだ、と考えるのである。ただその場合、「かく」が浮舟の文ではなく、薫自身の心情をさすことになり、多少唐突の感をまぬがれない……（『源氏物語山路の露』一五八頁）

と述べられた。「われながら」の「われ」を、

Ⓐ浮舟　　Ⓑ薫

のいずれに解するかによって、「かく」の内容が変化するのであるが、本注釈では「われ」をⒷ薫と解してみた。だが、問題の残る箇所である（後考を待つ）。

④「心の闇」について。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」（後撰・雑一・藤原兼輔）の歌から、「くれまどふ心の闇も堪へがたき片端をだに……」（源氏・桐壺）のごとく、親が子を思う折の心の迷いを通常はいうようになった。ところで、本位田氏（『源氏物語山路の露』四九頁）は、

源氏物語では、心の闇の意に用いられるが、右京大夫は妄執の心の闇の意に用いる。

と指摘され、かつ

恋ひわぶる心の闇にくらませて秋のみやまに月はすむらむ

の歌をその用例としてあげておられる。

⑤「ためらひ給へる御袖の雫」について。

「『ためらふ』は、袖を目頭にあてて涙をおさえる意」（本位田重美『源氏物語山路の露』一五八頁）ということで、浮舟の「伝へよとあるらん文」を見た時の、薫の悲嘆の姿である。「ところせきまで」流す薫の涙は、浮舟の歌二首と、それが「墨つきかれがれ」であったことによるものであった。折から「ほのぼのと明け行く空の光」の中で、「ものを深くあはれと思ひ給へる御けしき」は「なまめかしく」て、小君の目を引きつける。そうした時の若君達の涙を流す姿は、なかなかの美を感じさせるものがあった。また、そこに美を感ずるところにこそ、当代の美意識があったのである。